

脳梗塞の息子（四） 発症後二年目に突入

中村 アキヤ

8月10日

布団の中で三日前のことを思い出していた。

癩に触って、癩にさわってその日の帰り道は勿論、帰宅してからも一言も口を利かなかつた。この三日間は顔を見るのも嫌だった。

発症後の一年目の記念日はこうして不愉快なまま終わったのだから。

しかしどんなに口惜しくても相手は息子であり、しかも親にしか面倒をみてもらえない身体障害者である。

あれ以来、哲也とは口を利いていないが、今日は初台病院に迎えに行くことになっているし、明日は赤羽の針灸院に往復付き合わせねばならない。

親としてこのまま意地を張り続けるわけにはゆかない。それにしてもあの悪魔の表情は、と思い返しているうちに、あの日は発症事故の一周忌で一年前哲也に憑りついた悪魔が再来したのかもしれないと思うようになった。

昨年倒れたあの日も、暑い夏の日で身心ともに疲れた哲也はあの時悪魔に憑りつかれたのだ。

本人にその気がないのに、父親がいつまでも意地をはって息子に辛く当たることもあるまい。そういえば哲也も妙にペコペコ頭を下げ恭順の意を示している。本人の気持ちを考えるとそれもいじらしいものだ。

迎えに行った初台病院で、PTの柴田さんから新しい装具をつくるため、東京都の身障者の補助金を受ける手続きを教わった、何時ものことながら複雑である。

8月11日

哲也は赤羽の針灸院でうつ伏せの姿勢で針を打つようになった。後頭部から脊髄、上腕部の裏側の筋肉などへ。拘縮していた腕、手首、指は緩やかに伸びてきている。鉤縮している右手に紙筒を持たせるように無理に押し込んで針を打っている先生が「握力がでている」という。

前回の初台のレポートでは左手の握力は二十六キロで右手はゼロキロの廃疾手だった。それがほんの少しではあるが、握りを強めることが出来るようだ。先生がブヨブヨの保冷剤の入っているビニール袋をくれた。「これをいつも握っていると脳が握る回路を回復させるかも知れない」と言われた。

8月12日

今朝、本人が未だ寝ている時伸びをした。動かないはずの右手を伸ばして指の何本かが動いている。右足の親指も伸びと同時に反り返り拘縮が治っている。本人が目覚めてからそのことを話したが全く感じていないとのこと。

新宿区の福祉課に電話し、装具の新調の手続きについて聴いた。先ず東京都の傷害福祉センターに本人が出向き認定してもらおう必要があるとのこと、早速予約してもらった。あとはその結果次第だそうだ。

8月19日

東京都の傷害福祉センターに行った。立派な建物で壁にいい絵が飾ってあるが、人が少なくガランとしている。しばらく待たされた。玄関から事務所まで案内した人も、係りの人も身障者で、前者は足がやや不自由、後者は極度の近眼で字を読むとき辛そうだった。初台のPTの推薦通りに手続きをし、カードを貰った。身障者でもなんとか働いている姿をみて哲也もそうなって欲しいと思った。

8月22日

この日の初台リハビリ友の会の場所は初台病院内ではなく、渋谷参宮橋の高齢者センターとの連絡で、哲也には歩く距離が長くアクセスが難しいので欠席した。

8月23日

哲也は入浴では、全く他人の手を借りずにできるようになった。浴槽に入る時は椅子を使うが、出る時は自力で出る。保護具がなくても安定して立って身体を拭ける。相当な進歩だ。洗い場では、動かない右手にシャワーを握らせて左手を添えて身体にお湯を掛けている。とにかく右手を使わせるのだ。

8月28日

高木先生との治療中の会話。「哲也さんは何歳まで生きたいの？ 九十、百歳？ エッ百二十五歳まで？ 一体何になりたいの？」「仙人」「どこに住むの？」「富士山の五合目、いや軽井沢」「ずいぶん贅沢な仙人ね！」針を打つと夢見心地になるらしい。

9月3日

哲也がなにか言っているが良く理解出来ない。彼の部屋のPCまで行き、ニュース欄を見ると「阪神の矢野引退」のことであった。

9月4日

高木先生からもうすぐ治療を始めてから半年になるけれど、哲也さんは回復が非常に早いから治療甲斐があるといわれた。半年は過ぎてしまうとあつという間だ。お陰様で足の拘縮はほとんどなくなり、固まっていた右手も柔らかになり肘を曲げてコブシを肩の高さまで上げられるようになった。

針を刺すと右足も右手も相当響くらしく哲也は顔をしかめている。「痛くても我慢」と自分に言い聞かせている。

9月11日

コスモスで哲也は右手の親指の腹を触りながらなにか言っている。これまでになかったような感触があるらしい。もしかしたら神経がつながるのではないかと数箇所につき針をしてもらう。

9月13日

哲也が以前働いていた東京セントラル(株)に行き、牧原社長と面談。九月末に終わる休職期間を健康保険からの傷害手当金のなくなる三月まで延期してもらおうよう要請した。

「今、会社と縁が切れてしまうと挨拶にも来れない。あと半年もすればなんとか会社に何ってお礼と挨拶ができるので」と。社長は快諾してくれた。

有難い。さらに社長は「私は傷害者スポーツセンターと関係があるので国立や十条の施設に哲也君を連れて行って見学をさせたらヤル気もつと出るのではないか」とのご意見。

社長ご自身も一時顔の半分が麻痺して喋れなくなり、医者は治らないといっ

たが信念を持つてリハビリをしたら治ったそうだ。

要は本人の治ろうという気持ちが一番大事なのだからあらゆる手段でエンカレッジすべきだとのこと。

コスモス針灸院は九月十九日の週は針休みと称して休み。翌週からは第五クールに入るとのこと。これからは喋る能力を増すのが目的とのことだ。

初台友の会から十一月七、八日に一泊で奥只見方面に遠足行事との連絡。早速申し込む。

9月17日

初台に十七時半に迎えに行き、食堂で軽く食事を摂り、タクシーで新宿文化センターに移動し、小朝と歌丸の落語を聞く。落語は面白かったが、哲也は十分理解できなかった様子。帰宅してから「申し訳ない」と言っていた。

まだ、大勢の中に入るには抵抗感があり、長い話についてゆけない様子であった。

9月21日

やや涼しくなつて哲也の歩行が安定しスピードが速まった。夜は相変わらず漢字書きや発音の勉強をしている。初台で介護士の阿諏訪さんが「右手が動くようになったが、本人は自覚していない。指先を動かすには未だ麻痺がありません。肩の筋肉がもっと付けばいいのですが」と言っていた。

この数日哲也は少ししゃべれるようになった。二階で弟の晋也となにか話している。弟だと話しやすいらしい。弟の晋也も我慢強く兄貴のタドタドしい言葉の文意を推測しながら相手をしている。

父親とはなかなかだが。それでも「有り難う」とはつきり言える様になり、その言葉を連発している。

二階の自分の部屋を整理し昔のビデオを発見し、急に見たくなつた様子で、ビデオデッキを取り出してセットの準備をしている。

9月22日

哲也に「この頃よく話せるようになったな。お父さんは嬉しいよ。もっと大きな声でドンドン喋れよ」といったら「イヤー」と照れながらも嬉しそう。「三年もすれば自然に言語中枢が治るみたいよ」と妻が言うが、三年も待てる心境

ではない。

昨年哲也の発病直後しよげていた私に「中村さん、息子さんの喋りは絶対治るよ！」と大声で励ましてくれた友人の植松さんが心臓で入院中とか。心配だ。私自身も冠動脈にステントが入っているのでもいつ何かが起きないとも限らない。

9月24日

朝から雨だったが、哲也は杖の代わりに傘を左手でもって出かけた。なんの支障もないようだ。杖を持ったほうが乗り物で席を譲ってもらいやすいのに。「今日哲也は一人でお風呂に入ったわよ」妻が嬉しそうに言った。これまでは見守り程度であったが、浴槽の蓋の取り外しや出入りまで一人で出来たそうだと。「一人で入れたんだって？」と聴くと「うん」と答え嬉しそうだった。

9月28日

新しい装具が届いた。ポリカーボ製の軽い仕様でふくらはぎまでカバーできる。当初はふくらはぎが擦れて痛いと言っていたが、すぐに慣れて歩き回る。TVを見て「ああ、阪神はまた負けちゃった」といってコップ酒を呷っている。

10月2日

コスモスで、哲也に針を打ちながらの先生と赤羽付近の話をしていた。近所の岩淵の駅のそばには荒川が流れているという話になった。それまでウツラウツラしていた哲也が突然目を開けて「岩淵、日本酒」と言った。

好物の日本酒の醸造酒屋があるらしい。それから日本酒の話になって、東京の銘酒は「笹の井」とすぐに答える。それまでブスツとしていたのにニコニコしている。帰宅して漢字の勉強中。塀という字を習っていると突然「囲いをつくったんですよ。ヘーイ」と一口落語の一節を喋った。高校の落研で習った一節を思い出したらしい。

10月8日

初台の石原院長先生との面接で先生がニコニコしながら「中村君は凄く頑張っているとのレポートが上がってきています。この調子で半年したらどんなに回復してるか楽しみです」と言ってくれた。

それから家庭での生活の話から私が、息子は酒の飲み過ぎだと思おうと話すと、

「どうですか半年酒を控えて頑張っは」と先生。「ハイ」と哲也はアツサリと断酒を誓った。ウソばかりと思っただが黙ってた。

10月9日

この話を赤羽の高木先生に伝えたら、先生は喜び「哲也さん本当にお酒やめられる?」「ハイ、土曜日と日曜日は飲むけど」と答えた。

先生はそれなら肝臓に針が打てる、すると治りが一層早まると太鼓判を押してくれた。

10月18日

眼鏡の度を調整しに往復四十分歩いて眼鏡屋にいった。昨年十一月に初台病院まで出張してくれた甲斐さんが「ずいぶん話ができるようになりましたね」と言ってくれた。

10月22日

初台の帰りに地下鉄の若松河田駅から家まで七百メートルを歩いて帰った。歩くスピードも常人と変らなくなった。

10月24日

近くの西向天神社の境内で夕焼け寄席と称して三遊亭金馬さんの落語公演があった。哲也は「新作か古典落語か」とこたわったが実際は古典で、とても面白かった。神社への行きがけに初台病院の同窓生である金馬夫人を追い抜いたら、「なんとまあ治り方が早いのだろう」と驚かれた。

10月29日

初台の石原先生面接。「治りが早いのもう三ヶ月頑張ってもらおう」と言われて気分を良くして、帰路は初台から西新宿七丁目駅まで歩いた由。

初台でのリハビリでは、六分間の歩行距離をこれまでの三百八十七メートルから四百メートルへ目標アップ。早く歩く練習だ。

10月30日

朝、赤羽の高木先生から電話があり、台風接近につき本日の診療は中止とのこと。哲也は残念がった。

昨日そして今日と、哲也は二階の自分の部屋を精力的に整理している。そろそろ一階の臨時の病室から二階に本拠を移したいとの意思表示だ。

11月1日

今月七、八日に予定された初台リハビリ友の会の遠足旅行の連絡がやっと届いた。温泉に入り、紅葉をみてゴンドラや只見湖の遊覧船と内容は豊富だ。

哲也も楽しみにして自分のザックを出してきた。

今年の私の誕生日は哲也と一緒にバス旅行だ。昨年とえらい違いだ。皆さんに感謝、感謝！

11月3日

昨日、初台で握力のテストをした由。哲也は両親には結果を報告せず、赤羽の高木先生に報告したようだ。左手は三十七キロ、右手は九・九キロ。先日まで何も掴めなかった右手が動き出した！ これまででは全く動かさず硬く内側に拘縮していたあの右手だ。正直いって本当に嬉しい。本人がやや自信をもって右手を動かすと、肘が肩の高さにまで上がっている。指が動くのはいつか待ち遠しい。言葉もすこしずつ繋がってきたが、まだ発音が聞き取れない場合が多いのが残念。

11月7日

今日は奥只見へのバス旅行。朝八時に病院に集合。総勢六十名を越すが、参加者の三分の一は車椅子。歩ける人もかなり不自由で哲也は歩ける組のトップ十人に入る。口を利けない人もかなり居るが、皆さんファイトを持って参加している。一方、病院側もボランティア参加の大西先生をはじめ、数名の担当者が気を働かして献身的にヘルプしている。

有給休暇をとって障害者の人たちを、旅行に連れてゆくスタッフの気持ちは非常に有難い。神様みたいだと友の会の金光会長が言っていた。

車椅子のバスへの乗降はリフトを使用するので非常に時間がかかる。トイレに行くにも一々付き添いが必要。身体が不自由な上に動作が遅い。とにかく時間がかかる。

ホテルでの大きな浴場では、スタッフが介助してくれるはずだったが、重症の人に時間をとられて哲也まで回ってこない。裸になり装具をはずして手すりの無い浴場をソロソロ歩きとにかく浴槽に入ることが出来た。久しぶりの温泉

に首まで浸かり哲也は満足そう。

食堂では夕食、翌日の朝食ともにリハビリ友の会の金光会長の前の席であった。会長から毎朝の自己リハビリの方法や、精神的な面とかいろいろアドバイスを受けた。

只見湖の遊覧船に乗るのにバスから棧橋まで十分程度歩く必要があった。哲也は見栄を張って、杖なしで歩きトップで棧橋に到着し、四段の階段を下りて船に乗った。車椅子の人は四人で車椅子を持ち上げて、乗降するので大変だ。

お喋りが達人な人でもいざ歩き出すと哲也にはかなわない。

「中村さん。凄いね」と言われて哲也はまんざらではない。有意義なバス旅行だった。

11月9日

バス旅行で自信をつけたのか哲也は初台病院への往復を杖無しで行った。病院で以前お世話になった二瓶さん、内野さんに出会った由、二人に褒められて哲也はご満悦だったと。

11月10日

発病以来第三者と喋ったことのない哲也は、大胆にも自分の携帯電話で理髪店の予約をやった。理髪店の主人も突然変な発音の電話で面食らった様子。それでも翌日の十一時の予約が完了した。バス旅行以来自信がいたらしくえらい積極的だ。

赤羽のコスモ針灸院にもバスとJRを乗り継いで杖なしでいった。一年以上も休んでいた異業種交友会（月曜会）の忘年会も出席したいというし、初台友の会の忘年会も申し込みをしたい由。バス旅行の効果は絶大だ。

11月17日

赤羽の高木先生の右手の針治療中突然哲也の右肩の三角筋がビクビク動き、その二分後に肩から上腕二頭筋にかけて筋肉全体が激しく痙攣した。

先生は大喜びでどうやら肩から腕の筋膜に神経が戻ったらしいと言う。本人は肩が痛いと言うが、手足の麻痺が改善される前はいつもどこか痛いというので今回もそうであれば有難い。彼は最近以前よりも積極的に話をするようになった。

11月19日

旅行後の変化を石原先生に報告。先生は「自分で電話するなんてまさに画期的だ」と喜んでおられた。

これまで使用してきた杖のグリップにひびが入った。杖の中心部分も曲がってしまったので初台で杖を新調した。古い杖に感謝。お世話になりました。

11月29日

発病以来初めて、哲也と一緒に彼の元の職場の東京セントラル（株）を訪問した。新宿から中央線特別快速で日野までゆく。日野駅では総務の原川さんがクルマで迎えてくれた。会社までの道中、哲也は一年ぶりの風景を懐かしがった。

会社では社長に挨拶した後、各部門を回る。どの部門でも全員が総立ちで歓迎してくれ、わざわざ廊下まで出て来て肩をたたいて激励してくれた。

発病以来世話になっている総務部では「いま初台病院でリハビリしています。

本当に申し訳ない」との哲也のわかりにくい挨拶を原川さんが補足してくれた。

哲也は大役を果たしたかのように満足していた。無理を押して連れて行ってよかった。

12月4日

赤羽で腕や足、頭に針を刺して仰臥して右腕の上下の練習中に突然伸ばしていた哲也の右腕が上がり出した。肘を曲げて手首が上方に上がる。

なおも肩を持ち上げて右の拳が顔に付く。頬や顎、目などに触れる。半年前は硬く拘縮していた腕や指は柔らかくなった。自分の意思で手首、肘、肩を動かす顔が触れるようになったのだ。本人はまだ自覚がないのか、自分の腕がどこまであがったのか目で確認している。

夜、新宿ヒルトンで倅子叔母主催の夕食会に親戚が十四名集合。賑やかに中華をご馳走になった。哲也は自重してアルコールはあまり飲まなかったが、食事は十分楽しんでいた。

12月6日

哲也が一年余り休んでいた異種業界のメンバーによるクラブ月曜会の忘年会が九段会館で開催された。哲也も昼間から入浴しておしゃれをして参加。

会では多くの方から「哲ちゃん」と声をかけていただいた。倒れる前は、幹

事団の一角を占め、受付などをして顔が売っていたらしい。特に女性会員といってもいずれも会社やお店のオーナーの原様、井上様、杉野様から優しく話しかけられ、なかには酒の徳利を持ってきて一緒に飲もうなどと誘われていた。スポーツマッサージの青樹先生には肩、腕をマッサージして頂き「どうだ楽になっただろう」といわれた。本人は正直に「いやあ感じない」と言っていたが、帰宅してから痛かった肩が治ったそうだった。

医者でお笑い講義の松本先生や作家の阿奈さんとも親しそうに挨拶していた。

会の最後に哲也は同期の宿谷さんに助けられて壇に上がった。司会の藤井さんから哲也の病状の紹介があり、「また元気になって幹事をやって欲しい」との激励の言葉があった。

本人も「有り難うございます」とたどたどしい挨拶をして満場から凄惨な歓声と拍手、「頑張れよ」の声が上がった。

あの活発だった哲也が杖をついてよろよろしている姿に、涙を拭いている数人の女性会員を見て、哲也は皆さんに好かれていたんだと思った。

散会后、出口に通ずる通路で「いやー、感動したよ」とのささやきが聞こえた。ありがたくて聞いているほうが感動した。

12月8日

赤羽で治療中、哲也は仰臥して三十秒余り右腕を安定に垂直にたててみせ、確実に回復していることを実演した。前回の初台友の会で鳥取の慈恵病院で磁気治療を受けた患者の講演があり、効果があったことを告げると哲也は「鳥取に行こう」と意欲を示した。

12月11日

赤羽駅まで一緒に行つてそこからコスモス院まで徒歩約十分、思い切つて付き添いなしで哲也を一人で行かせた。事前に高木先生にも連絡し、心配していたが、問題は無かった。

12月15日

初台リハビリ友の会の忘年会が新国立劇場の三階の「マエストロ」であった。歴代の名演奏者や指揮者のサイン入りの絵皿が壁一面にかかっている。出席者は患者と付き添いで総勢百名近く。

旅行でお世話になった大西先生、金光会長、幹事の福寿さんにお会いし、先日の礼を述べた。

食事のテーブルで同席の大塚さんは六十三歳で発症し現在七十歳。右手はつかえず、話もぼつぼつ程度。倒れたとき奥さんは不在で翌朝息子さんが見つかるまで何時間経っているのか判らなかつたということだった。

哲也の場合は発症後一時間以内に入院できて本当に良かった。会場からの帰途は訓練のため新宿から一人でバスに乗り帰らせた。

12月18日

寒波が一日だけ続いた。哲也は調子が悪いらしく歩幅がいつもより狭く、赤羽に着いた時は息を切らしていた。先生は手足が冷たく目の下が黒いのは調子が悪い証拠。寒いので注意するようにとのことであつた。それでも治療が終わる頃は機嫌も治つた。どうやら前の晩、密かに酒を飲んだらしい。

12月21日

初台からの帰りは西新宿七丁目駅まで歩き、駅の階段九十七段を下りて帰宅した。バスを使うより時間もコストも節約になる。

12月24日

石原先生の今年最後の面接。「良くがんばつたね。来年の目標は？」と聴かれ哲也は即答できず、返事に困つた。来年もこの病院で診てくれるのは大変な難い。

時間があつたので入院時お世話になつた病棟の五階に挨拶に行った。二瓶さん、内野さんがかなりの時間応対してくれた。哲也が入院していたとき、退院した患者が遊びにきたのを見て羨ましかつたことを思い出した。

12月25日

コスモスの高木先生も今年最後。「余り飲まないように」と念を押された。

12月26日

初台の餅つき大会。哲也は去年とは大違いで法被を着せられ餅を撞いた。終わってからもなかなか帰ろうとせず、知り合いの患者や療法士達と挨拶を交わっていた。石原先生との写真を撮つた。福寿さんが私に旅行の感想文を書いて

くれといってきた。

バス旅行に参加しての感想文を初台友の会会報「きらら」に投稿した。

著者：中村 晃也（哲也の父親）

『息子の哲也は昨年（平成二十一年）八月に脳内出血を発症して、国立医療センターで約一ヶ月療養の後、九月に初台リハビリテーション病院に転院、平成二十二年一月に退院し、その後週二回の通院リハビリを行っています。

右足は杖を突いて何とか歩ける程度、右腕は拘縮し大分伸ばせるようになったが全く動かず、喋るほうはハイ、イイエと数語発音できる程度でした。一年余り医療関係の方以外との直接接触も無かったので、多少引っ込み思案になり、本年十一月七、八日のバス旅行には不安一杯の参加でした。

息子は、今回のバス旅行者の中に車椅子の方も大分居られ、バスの乗降やトイレなどの大変な苦勞をもとせず、果敢に旅行に参加され、楽しんで居られる姿を目のあたりにして、自分も甘えては居られないことを自覚したようでした。

また、ホテルでの朝夕の食事の際に、金光会長から励ましのお言葉を頂き大いに勇気付けられた様子でした。只見湖の遊覧船に乗る段になって、はじめて杖無しで歩くと言い出し、バスから船着場への昇降も杖無しで歩き通しました。

バスの中でも自己紹介のマイクが回ってきてどうなるかと思いましたが、タドタドしくも人様の前で自分の名前を言えたことが大きな自信になったようで、帰宅後自分の携帯電話で近所の理髪店に電話し、不自由ながら予約を取ることができました。

皆様に勇気付けられて身体が不自由なのは自分だけではないこと、皆さんもそれなりに頑張っておられること、努力すれば病状も回復することを実感した効果は絶大でした。旅行後の十二月六日にも、以前幹事をしていたのですが、病気のため一年以上欠席していた異業種懇談会に参加して、大勢の仲間からよく帰ってきたと大歓迎を受けました。

それにつけてもバス旅行で示された大西先生、スタッフの皆様の献身的なご助力には全く頭の下がる思いです。本当に有り難うございました。また機会があれば積極的に参加させる所存です。今後ともよろしく願いたします。』

12月28日

初台病院での今年最後のリハビリ。これで無事今年は終わった。

皆さんお世話になりました。父親の私もお陰様で昨年と比べて精神的に立ち直ることが出来ました。

(9108語)